

八世紀前半におけるビザンツ皇帝選出のダイナミクス

——「混乱の時代」の皇帝たち——

小 林 功

【要約】七世紀末から八世紀初頭の約二〇年間、ビザンツ帝国は頻繁な政権交代と、それと密接に関連した内政の混乱に悩まされていた。このような「混乱の時代」に終止符を打ったのがレオン三世である。本稿では「混乱の時代」からレオン三世への政権交代期の皇帝選出のダイナミクスを分析していく。従来こうした分析に際しては、テマなどの軍の影響力が重視されてきた。だが本稿での検討から、地方に拠点を置くテマリ軍のみならず、中央政府の要職を占めていた人々の動向も無視することができなかったことが明らかとなる。レオン三世は、「混乱の時代」の皇帝たちが果たせなかった、地方と中央の双方の支持を集めることに成功し、それがレオン三世が長期にわたって帝位を維持できた要因となったのである。

史料 八六卷一号 二〇〇三年一月

一 はじめに

ペルシアとの戦いやアラブの勃興、バルカン半島でのスラヴ人の定住、そしてイタリアにおける影響力後退など、六世紀後半以降のビザンツ帝国は四周からの、長期にわたる脅威に悩まされていた。六四〇年代までにアラブに東方属州の大半を奪われて以降、七世紀後半に對外状況は一時膠着状態となっていたが、七世紀末以降状況は再度悪化していった。カルタゴを中心とする北アフリカの喪失（六九八年）や、第二次コンスタンティノープル包囲（七一七―七八年）にいたる

小アジアでのアラブ軍の攻勢、さらにバルカン半島でのブルガリアの脅威などに、ビザンツ帝国は悩まされた。

この時期はまた、国内の政情も不安定だった。すなわち六九五五年のユスティニアヌス二世（在位六八五—六九五、七〇五—七一年）の失脚から、七一七年のレオン三世（在位七一一—七四一年）の即位までの期間に、六人の皇帝が相次いで交代したのである。短期間での政権交代の連続は、帝国をめぐる対外状況にも大きな影響を与えた。先述した対外状況の悪化も、ビザンツ帝国の国内の混乱に助けられた側面が多分に存在している。

こうした内外の困難な状況が收拾されたのがレオン三世の時代だった。レオン三世は即位直後の一年に及ぶアラブのコンスタンティノープル包囲戦を乗り越えた後、二〇年以上にわたって皇帝の座にあった。そしてその地位は息子のコンスタンティノス五世（在位七四一—七七五年）に継承されていく。親から子への帝位継承は、実に約六〇年ぶりのことであった。

だが、レオン三世時代の政情が最初から安定していたわけではない。レオン三世時代には、なおアラブの脅威が過去のものになっていったわけではなかった。イタリアでも、ビザンツ帝国の地位はランゴバルドの攻勢やローマ教皇などの自立化傾向によって危機に瀕していた。^①国内の状況もお不安定で、反乱も繰り返して起きている。例えば即位直後、シチリア島では対立皇帝が現れているし、^②七一九年頃には元皇帝のアナスタシオス二世（在位七一三—七二五年）によるクーデター計画が露見した。七二〇年代の後半にはヘラス・キクラデス諸島で反乱が起き、反乱軍の艦隊がコンスタンティノープル近海まで迫ってきている。^③

要するに六世紀後半以降、内外ともにビザンツ帝国が落ち着きを取り戻すのは、実にレオン三世の治世後半であった。その中でも特に七世紀末から八世紀初頭の約二〇年間は、混乱が頂点に達した時期だった。この二〇年間は既に多くの人々によってさまざまに表現されているように、「混乱の時代」と呼ぶにふさわしい、ビザンツ帝国にとって非常に困難な時代だったのである。

この時期のビザンツ帝国における政権交代や政情不安については、七世紀に姿を現しつつあったテマとの関連で言及されることが多い。確かにこの時期の反乱や政権交代に際しては、中谷功治氏が指摘しているようにテマ・オブシキオンを中心とするテマの関与が明確に認められ、国内政治においてもテマの持っていた重要性は否定できない^⑥。

しかし、テマに代表されるような軍事的側面にあまりに傾斜した視点から、七―八世紀のビザンツ帝国の国内政治の混乱を説明するだけでは、分析は不十分である。テマの反乱や陰謀が全て、現皇帝の打倒のため首都に向かっていていることからも明らかのように、この時期の内政の混乱は、最終的には中央における皇帝選出をめぐる問題に帰着していた。それゆえ、この時期のビザンツ帝国の政治の動向を検討する場合には、テマのみならず首都の諸政治勢力・集団の動きを念頭に置きつつ、皇帝選出の経過を分析する必要がある。実際、皇帝選出の際にはテマ以外の集団が明らかに関与しており、その影響力を無視できない。例えば、先述したアナスタシオス二世はテマとは関係のない、首都の文官であった。また六九五年や六九八年の政変の際にはコンスタンティノープルのデーモスが関与している。すなわちこの時期のビザンツの政治動向を検討する際にはテマのみならず、コンスタンティノープルの諸政治勢力・集団の動きをも念頭に置かねばならない。従来の研究では、こうした集団に対する関心がテマに対してよりも希薄であったことは否定できない。

本稿の課題は、これまでも多くの研究者の関心を集めてきていたテマのみならず他の要素をも考慮に入れて、七世紀末―八世紀初頭の「混乱の時代」、及びレオン三世への政権交代期の、皇帝選出時のダイナミクスや、その際の帝国の諸集団の動向を分析することである。換言すれば、皇帝に選任され、そしてその地位を維持していくためには、どのような要素が必要なのかを、検討していくことである。ただし本稿では紙幅の関係などから、主な考察の対象をアナスタシオス二世とレオン三世に絞り込む。アナスタシオス二世は「混乱の時代」の皇帝の一人であると同時に、先述したようにレオン三世に対する陰謀を企図して、殺された人物である。

長期的な視野にたっても、本稿で議論する時期は大きな意味を持つ。古代末期の、いわゆる後期ローマ帝国の諸体制は、

六世紀以降の内外の状況の変化によって、徐々に変容を遂げていく。これは政治体制のみならず、文化的な側面での変化などをも含む大規模な変化だった。^④そしてこの長期にわたる変化を経て、新たなビザンツ国家がほぼその姿を示すのが八世紀前半である。^⑤

本稿で扱う時期は、こうした長期間に及ぶ変容の過程の最後の時期に相当する。ゆえに本稿での考察は、八世紀前半という短い期間のビザンツ帝国の一面の考察にとどまらぬ意味をも持つ。生まれつつあるビザンツ国家がどのような原理のもと、機能していたのか。その中で、皇帝はどのような位置を占めていたのか。本稿での検討から、こうしたことに對する手がかりも得られることだろう。

- ① レオン三世時代の対外状況に関しては、拙稿「最後の「海の軍人皇帝」——レオン三世とビザンツ艦隊——」『オリエン』四五—一、二〇〇二年、一八—二六頁（以下、拙稿^{a)}と略）。第Ⅲ・Ⅳ章も参照。^②
- ② Theophanes, *Chronographia*, Leipzig, 1883-5（以下、Theoph. ^{a)}略），pp. 398-399; Nikephorus, *Breviarum Historiarum*, Washington D.C., 1990（以下、Nik. ^{a)}略），ch. 55.
- ③ Theoph., pp. 405; Nik., ch. 60.
- ④ 例えばケーギは“twenty years of Anarchy”中谷功治氏は「混乱S二〇年」など表現している。W.E. Kaegi Jr., *Byzantine Military Unrest 471-843: An Interpretation*, Amsterdam, 1981, pp. 186-208（Chapter 10）；中谷功治「テュベ反乱とビザンツ帝国——「テマ」システム」の展開——『西洋史学』一四四、一九八六年、二二—四〇頁、二七頁。
- ⑤ この時期のテマに関についてはR.-J. Lilie, „Araber und Themen. Zum Einfluß der arabischen Expansion auf die byzantinische Militarorganisation“, in: A. Cameron (ed.), *The Byzantine and early Islamic Near East III: States, Resources and Armies*, Princeton, 1995, S. 425-460.
- ⑥ 中谷前掲論文参照。^⑦
- ⑦ 「ゲオルギオス年代記」によると、六九五年にレオンティオスは「夜の間に青組のデーモスによって皇帝と歓呼された」。Georgius Monachus, *Chronicon*, Leipzig, 1904（以下、GMと略），p. 731. 六九八年についても、アブシマロスが緑組のデーモスによって歓呼されたとする年代記が存在する。A. Cameron, *Circus Factions: Blues and Greens at Rome and Byzantium*, Oxford, 1976, pp. 267-268.
- ⑧ 拙稿「六—七世紀ビザンツ帝国における都市景観の変化——『米リス』から『カストロン』へ』説の再検討——『西洋史学』二〇六、二〇〇二年、一—三三頁も参照。
- ⑨ cf. J.F. Haldon, *Byzantium in the Seventh Century: the Transformation of a Culture*, Cambridge, 1997².

二 「混乱の時代」の皇帝たちの経歴

本章では、アナスタシオス二世とレオン三世の時代の考察に先立って、六九五年から七一七年までの「混乱の時代」に帝位にあった人物たちの経歴を概観する。そしてそれによって、この時期に皇帝に選任されるための基本的な条件がどのようなものであったのか、あらかじめ把握しておきたい。

(a) レオンティオス（在位六九五―六九八年）

レオンティオスはパトリキオスの爵位を持ち、コンスタンティノス四世（在位六六八―六八五年）とユステイニアノス二世の最初の治世の時期、テマ・アナトリコンのストラテーゴス（長官）などとして活動していた軍人であるが、ユステイニアノス二世の不興を買って六九二年頃から投獄されていた。しかし六九五年に解放され、テマ・ヘラスのストラテーゴスとして赴任する直前にクーデターによって皇帝となった。^①

(b) テイベリオス三世（アプシマロス）（在位六九八―七〇五年）

カルタゴがアラブ軍に征圧されたのを奪回すべく、六九七年に北アフリカに艦隊が派遣された。この艦隊に参加し、「コリュコスに拠点を持つキビュライオタイのドウルンガリオス（司令官）」であったのがアプシマロスである。この艦隊が六九八年に反乱を起こし、コンスタンティノールを制圧した際、アプシマロスが皇帝となっている。^② またシリア系資料によると、彼は即位する前にスラヴ人に対する戦勝をあげているという。^③ 「コリュコスに拠点を持つキビュライオタイのドウルンガリオス」の解釈については議論があるが、^④ 彼が比較的高い地位にあった軍人だったことは疑えない。

(c) ユステイニアノス二世（再）（在位七〇五―七一年）

ユステイニアノス二世はコンスタンティノス四世の息子で、七〇五年に再登位に成功した。

(d) フィリッピコス（バルダネス）（在位七一―七二三年）

バルダネスはパトリキオスのニケフォロスなる人物の息子であり、シリア系資料によると彼自身もパトリキオスだった。^⑤ 彼は七一年、ユステニアノス二世がケルソンに派遣した艦隊に同乗していたが、その際にケルソンの人々らによつて皇帝と宣言された。^⑥

(e) アナスタシオス二世（アルテミオス）（在位七二三―七一五年）

アナスタシオス二世に関しては次章で詳細に分析を行うが、皇帝になる前はプロトアセクレティス（書記局長官）を勤めていた。

(f) テオドシオス三世（在位七一五―七一七年）

後述するように七一五年、オプシキオンの軍の一部が反乱を起こした。反乱軍が皇帝として擁立したのがテオドシオス三世である。テオファネスやニケフォロスによると彼は小アジアのアドラミュティオンの徴税役人で、「政治には何の關係もない普通の人」だった。だが反乱軍は山に逃げ込んだテオドシオスを執拗に追跡して捕捉し、皇帝即位を強要しており、^⑦ テオファネスなどが伝えるような、地方の一介の小役人とは考えにくい。彼はサムナーの研究によると、ティペリオス三世の息子であるという。^⑧

これら六人の皇帝たちの経歴から確認できることとして第一に、皇帝即位前の社会的な地位が比較的高いことがあげられる。ユステニアノス二世は別格としても、レオンティオス、ティペリオス三世、フィリッピコス、アナスタシオス二世も軍あるいは中央政府の要職を勤めていた人物たちである。ひとりテオドシオス三世のみが社会的地位が不明だが、彼もサムナーの見解に従えば（二元）皇帝の息子で、社会的地位が低いとは言えないだろう。

皇帝に即位する際も、フィリッピコス^⑨、そしてテオドシオス三世のように、当時の皇帝に対する陰謀や反乱の中心的な

当事者ではなかったにも関わらず、皇帝に推挙・歓呼されている人物が目立つ。これは、皇帝の推挙にあたって候補者の社会的な出自や地位が幾分か考慮されていることを示唆している。

第二に、軍事的失策が彼らの失脚の要因となっている場合が多い。レオンテイオス、ユステニアノス二世、アナスタシオス二世は派遣した軍の反乱によって失脚している。テオドシオス三世も後述するように、アナトリコンとアルメニアコンの軍の反抗が失脚の直接の原因となっている。アナスタシオス二世やテオドシオス三世のように軍事的経歴の欠如した皇帝の治世が極端に短く、反対に小アジア東部におけるアラブ軍の攻勢を食い止めることに成功していたティペリオス三世の治世が六人の中でもっとも長いことは、厳しい対外情勢の中にビザンツ帝国が置かれていたこともあり、皇帝としての包括的軍事手腕^①が問われていたことを示していると言えよう。

以上要するに、「混乱の時代」の皇帝にはいくつかの共通する特徴が看取できる。第一に、皇帝には一定以上の高い社会的地位を持った人物が選ばれていた。これは、皇帝にはそれにふさわしい社会的地位を持った人物が就任すべきであるといった通念が存在していた可能性を示唆する。また第二に、皇帝には軍事的な成果が求められていた。対外遠征の失敗や軍の皇帝に対する不満は、皇帝の地位を危険にさらす大きな要因だった。

「混乱の時代」といえども、どのような人物でも皇帝になることが可能だったのではない。当時のビザンツ帝国を動かしていた人々や集団の支持を得られる資質を持った人物でなければ、帝位につくことも維持することもできなかったのである。

- ① Theoph., pp. 368-369: Nik., ch. 40: 渡辺金一『コンスタンティノープル千年——革命劇場——』岩波新書、一九八五年、一五八—一五九頁も参照。
- ② Theoph., pp. 370-371: Nik., ch. 41.
- ③ J.-B. Chabot (tr.), *Chronique de Michel le Syrien II*, Paris, 1901, p. 473.
- ④ キビュライオタイは一般的には、この時期はカラビシアノイ(艦隊)に属して小アジア南岸部を管轄する部隊で、後にテマ・キビュライオタイへ発展する部分とされている。拙稿(a)参照。ただしグリゴリーウ・ヨアニドゥーのように、アブシマロスAbshimosは小アジア南岸部の小領

域を管轄する陸上部隊の司令官に過ぎなかつたとする見解もある。
M. Γρηγορίου-Παυλίδου, "Τὸ ναυτικὸ θέμα τῶν Κιβυργκουαίων.
Συμπόλη στὸ πρὸβλημα τῆς ἰδρυτικῆς τοῦ", *Βυζαντινά* 11 (1982),
pp. 201-221.

⑤ Agatho Diaconus et Charophylax, *Epilogus*, in: *Concilium universale Constantinopolitanum tertium*, Berlin, 1992, pp. 898-901 (以下「Agathon 略」), p. 899.; Nik., ch. 45.: *The secular History of Dionysius of Tel-Mahre reconstituted* (*Chronicle of AD 1234*), in: A. Palmer (tr.), *The Seventh Century in the West-Syrian Chronicles*, Liverpool, 1993, pp. 111-221, p. 209.

⑥ Theoph., pp. 377-381.; Nik., ch. 45.

⑦ Theoph., p. 385.; Nik., ch. 50.

三 アナスタシオス二世の即位と失脚

本章では、アナスタシオス二世の治世に関して詳細な分析を加え、どのような集団が彼を支えていたのか、明らかにしていく。とはいえ、彼の治世は二年余と非常に短く、彼が皇帝在位中に行つた施策などについては多くを語ることができない。ゆえに本章では彼の即位と失脚のプロセスに重点をおいて分析を行うことになる。

(一) アナスタシオス二世の即位

この時期はビザンツ史の中でもとりわけ資料の少ない時期である。主要な資料となるのは、修道士テオファネスの『年代記』とコンスタンティノーブル総主教ニケフォロスの『簡約歴史』である。これらは本稿で分析する時代より約一世紀後に著されたものであるが、現在では失われた同時代資料などを利用していると考えられ、利用価値が高い。そしてアナ

⑧ G. V. Sumner, "Philippicus, Anastasius II and Theodosius III", *GRBS* 17 (1976), pp. 287-294.

⑨ ニケフォロスによるとフィリッピコスはケルソンに追放されるため艦隊に乗船していた。なおレオンティオスも、周囲の説得によってクーデター遂行に踏み切っている。

⑩ 七世紀末以降の小アジアでのアラブの攻勢は、六九二年のセバストポリスでの大敗以降激化した。だがティベリオス三世は兄弟のヘラクレイオスを「全騎兵テーマのモノストラテゴス」に任命し (Theoph., p. 371) アラブの攻勢を食い止めることには成功していた。

⑪ この場合、皇帝個人が軍勢を率いて成果を挙げることが期待されているわけではない。

スタシオス二世の即位の事情に関しては、彼の同時代人で聖ソフィア教会の輔祭だったアガトンの『補説』が、貴重な情報を我々に提供している。

アナスタシオス二世の前の皇帝はフィリッピコスである。彼は六八〇―六八一年の第六回全地公会議の決議を破棄して、単意論の教義を支持したことで知られる皇帝である。これが多くの人々の不満を引き起こしたことは想像に難くない。事実フィリッピコスが失脚してアナスタシオス二世が即位すると、彼はすぐにフィリッピコスの方針を破棄して第六回全地公会議の決議を復活させている。^① またトラキアにおけるブルガリアとの戦いも苦戦を強いられており、アガトンによると「隣接するオノグル・ブルガールの人々が攻撃をしかけてきて、トラキアに住むキリスト教徒の多くが捕虜にされたり殺されたり」していた。^② これもフィリッピコスの失脚の一因となった可能性が高い。こうした状況下、トラキアをブルガリアの脅威から守るため、テオフアネスとニケフォロスが言及しているように、当時トラキアにはテマ・オブシキオンの軍の一部が駐屯していた。^③

テオフアネス、ニケフォロス、アガトンの報告を総合すると、フィリッピコスの失脚とアナスタシオス二世の即位は以下のような経過をたどっている。七二三年の聖霊降臨祭前日の土曜日（六月二日）、フィリッピコスは市内のゼウクシッポス浴場で入浴した後、コンスタンティノープルの「多くの古くからの市民たち」と会食を行った。^④ その席の後、フィリッピコスが宮殿で仮眠をとっていた時に、

突然黄金門を通じてオブシキオンのプロトストラトルのルフォスが、パトリキオスかつオブシキオンのコメス（長官）のゲオルギオス・ラフォスとパトリキオスのテオドロス・ミューアキオスの意を受けて、トラキアにいたこのテマの兵の何人かとともに（コンスタンティノープルに）入り込んだ。そして宮殿に突入して昼寝をしていたフィリッピコスを見つけ、彼を捕らえて緑組のオルナトリオンに連れ込んだ。そしてそこで彼を盲目にしたのだが、これらのことは誰にも気づかれなかった。^⑤

そして翌日の聖霊降臨祭の祝日（六月三日）に、聖ソフィア教会でプロトアセクレティスのアルテミオス（フィラルテミ

オス)が皇帝として歓呼・戴冠され、アナスタシオスと改名した。その時の状況をアガトンは以下のように伝えている。

アセクレティオンの部局の長官を動めていたフィラルテミオスという名の人物——改名してアナスタシオス——が、敬虔で正統信仰を持つ皇帝として公に示された。(皇帝は)聖なる元老院、全ての聖職者、当時(コンスタンティノープルに)駐在していたキリストを愛する全軍隊、そして都市のデーモス全体の共通の決定と審査によって、普遍的できわめて聖なる使徒の大教会においてまず歓呼され、そして総主教のヨハネスによって、聖なるそして全く畏れ多き祭壇にて戴冠された。^⑦

フィリッピコス^⑧の失脚とアナスタシオス二世の即位の経過に関しては、近年ハリンが分析を行っている。以下、彼女の見解に従いつつ分析を行っていく。

資料から確認できる、この陰謀のポイントは以下の点である。

- (a) トラキアにいたルフォスたちがコンスタンティノープルの大城壁を通過し、さらに何の抵抗も受けることなく大宮殿の内部に侵入して、容易に皇帝を捕らえることができたこと
- (b) 皇帝が日中に会食を行って、皇帝以下の多くの人々が昼寝をしていた、絶好のタイミングに陰謀が実行されていること
- (c) ルフォスたちがフィリッピコス^⑧をヒッポドローム内の緑組のオルナトリオンに連行し、そこで彼を盲目にしていること
- (d) 翌朝のアナスタシオスの戴冠まで、宮殿内あるいは首都内の人々が誰もフィリッピコス失脚の知らせを広めようとしなかった(あるいは知らなかった)こと
- (e) 翌日のアナスタシオス二世の戴冠は、クーデターの影が全く感じられない、通常の皇帝即位儀礼に従っていること

これらの点から、フィリッピコス失脚・アナスタシオス二世即位の陰謀に、多くの人々が関与していたことが明らかとなる。第一に、コンスタンティノープルのデーモスが関与している。フィリッピコスはルフォスらに捕らえられた後、ヒツポドロームの緑組のオルナトリオンに連行されている。これは、この陰謀にデーモス^⑨、少なくとも緑組が関与していたことを明らかにしている。

第二に、大宮殿にルフォスたちが侵入する手引きをした人物がいたことからわかるように、宮殿内に陰謀に関与していた人々が存在した。ハリンは宮殿内で陰謀に関与した人々として、緑組のデーモスの他にプロトアセクレティスのアルテミオス（Ⅱアナスタシオス二世）をあげている。だが、翌日まで厳密な情報管制が行われていること、そして翌日のアナスタシオス二世の戴冠儀礼が綿密に準備されていることから、それ以外にも関与した人々がいたことは明らかである。

七一三年に関する資料からは、他の関与者を詳らかにすることはできない。だが、別の報告から推定することは可能である。すなわち、失脚後テッサロニケに追放されていたアナスタシオスが七一九年頃に起こした、レオン三世に対する陰謀の報告である。

テオフアネスとニケフォロスによると、七一九年頃の陰謀にはマギストロスのニケタスⅡクシュリニテス、アナスタシオス二世が皇帝だった頃にプロトアセクレティスだった（すなわち、アナスタシオス二世の後任にあたる）テオクティストス、オブシキオンのコメスのイソエス、城壁防衛長官のニケタスⅡアントラクス、そしてパトリキオスのシシニオスⅡレンダキオスが関与していた。このうちシシニオスⅡレンダキオスは当時ブルガリアにおり、アナスタシオス二世は彼を通じてブルガリア軍の助力を得ることに成功した。またアナスタシオス二世は首都にいたニケタスⅡクシュリニテスらに、「かつての友情を想起させ、準備を整えて彼のもとに結集し、首都を解放して彼を皇帝として迎え入れるよう」要請した。^⑩

この陰謀の参加者から確認できるのは、以下のような点である。第一に、コンスタンティノープルで陰謀に参加していたのはマギストロスやプロトアセクレティスなど、中央政府の中枢部を占める文官たちであった。マギストロスは古代末

期の中央政府の最高官職であるマギステル・オフィキオルムの後身で、少なくとも九世紀前半に至るまで、その権能をいくばくかは維持していた。^⑪ 八世紀前半の時点では一層、中央政府の最高顧問官的な意味合いを強く保持していただろう。

第二に、城壁防衛長官が陰謀に関与している。ハルドンによると、城壁防衛部隊はかつてデーモスによって担われていた首都内の民警団を、七世紀末に再編して成立したものであるという。^⑫ この指摘が正しいなら、再編もないこの時期には、城壁防衛部隊やその長官はおデーモスとの密接な関わりを残していた可能性が高い。

以上要するに、七一九年頃の陰謀の際にアナスタシオス二世を支持していたのはコンスタンティノープルの有力者の一部と城壁防衛部隊（そして恐らく彼らと関係の深かったデーモス）だった。アナスタシオス二世がテッサロニケに追放されている、コンスタンティノープルやその内外で新たな人脈を形成することは困難だったことや、双方の陰謀にデーモスの関与の可能性が考えられることを考えると、七一九年の陰謀に参加した集団と七一三年の陰謀に参加した集団は、重複している可能性がきわめて高い。つまり、七一九年と同様七一三年の陰謀にも、中央政府の要職にある人々が関与していたと考えることができる。彼らはアルテミオスとともにフィリッピコスに対する陰謀を企画した。そして「聖なる元老院」に属する人々^⑬として、アルテミオスの皇帝戴冠式を準備・参加したのである。

反対に、テマ・オブシキオンの関与の度合いは限定的である。ニケフォロスやテオフアネスではこの陰謀を主導したとされているオブシキオンのコメスのゲオルギオスⅡブラフォスとパトリキオスのテオドロスⅡミューアキオスの二人は、アナスタシオス二世が即位した直後に失脚して追放されている。^⑭ さらにテオドロスⅡミューアキオスはユスティニアノス二世の側近だった人物で、オブシキオンとの密接な関係は特に確認できない。恐らくゲオルギオスⅡブラフォスやテオドロスⅡミューアキオスは、本当にこの陰謀を企画していた人々に利用されていたに過ぎない。またアナスタシオス二世の戴冠が行われた六月三日の時点で、オブシキオンの軍の大半が首都内にいなかった（他のテマの軍も当然不在である）ことを考えると、アナスタシオス二世の戴冠式に参加した「キリストを愛する軍隊の全て」は、首都内の小規模の防衛部隊（先述し

たようにこれらはデーモスとの強い関係が考えられる」と、ベックも指摘しているように儀仗兵^⑮だつたらう。

なお七一九年頃の陰謀の際も、テマの関与は確認できない。オブシキオンのコメスのイソエスが陰謀に関与しているが、ヴィンケルマンが示唆しているようにイソエスがオブシキオンの軍を把握していなかった可能性が考えられること^⑯から、オブシキオンの軍自体は陰謀に関与していなかっただろう。ここからも、七一三年の陰謀に際しての軍の関与の小ささが示唆される。

以上要するに七一三年の陰謀、そして続くアナスタシオス二世の即位に際して、当時のビザンツ軍の主力だったテマの軍は本質的な関与を行っていない。フィリッピコス失脚の陰謀を企てた首謀者たちは軍ではなく、コンスタンティノープルの有力な文官たちだったのである。

本節での分析をまとめておく。フィリッピコスの時代、トラキアではブルガリアが大きな脅威となっており、オブシキオンをはじめとする軍にはフィリッピコスに対する不満が高まっていた。またキリスト教の教義をめぐる問題も人々の不満を集めていた。こうした状況下に陰謀が行われ、フィリッピコスは失脚してアナスタシオス二世が帝位についた。この陰謀にはテマ・オブシキオンの兵士の一部が参加しているものの、彼らはこの陰謀に主体的に参加していたのではない。実際にこの陰謀を主導していたのは、中央政府の有力な文官たちだった。彼らはコンスタンティノープルのデーモスと密接に連携して準備を行った。そして実際の陰謀遂行に際してはオブシキオンの兵士を利用し、フィリッピコスの排除に成功したのである。

（二） アナスタシオス二世の失脚

アナスタシオス二世の失脚に関する資料はテオフアネスとニケフォロスであるが、この二つの年代記は共通の資料に依

扱していたようで、その記述はほぼ同一である。

アナスタシオス二世は即位後、「非常に有能な人々を騎兵テマのストラテegosに、また特に学識のある人々を政府に登用し」、矢継ぎ早にさまざまな政策を実行した。これらの政策は艦隊やコンスタンティノープル防衛の強化など時宜に適した政策が多く、レオン三世はコンスタンティノープル防衛戦の際にアナスタシオス二世の政策の恩恵を大きく受けている。

一方アラブはコンスタンティノープル攻略に向けての準備を進めていた。そしてその一環として七一五年に、艦隊造船の材木を入手するため、小アジア南岸部に艦隊を派遣してきた。アナスタシオス二世はこれを阻止すべく、ロードス島に部隊を派遣した。ニケフォロスの報告には、

それから、サラセン人の艦隊がアレクサンドリア市から、造船用のイトスギ材を得るためにフォイニクスにやってくるという情報が入ったので、(皇帝は)快速船を選び、それにいわゆるオブシキオン地方の兵を乗せてロードス島に送った。またかの地に他のローマ艦隊も集めた。^②

とあり、この軍の主力がテマ・オブシキオンから派遣された部隊であったことが看取できる。

しかしロードス島で、オブシキオンから派遣された部隊が突如反乱を起こす。彼らは遠征軍の指揮官で、ロゴテース・トウー・ゲニクー(税務長官)かつ聖ソフィア教会の輔祭だったヨハネスを殺すと、アナスタシオス二世を失脚させるべくコンスタンティノープルへの進撃を開始した。そして途中でテオドシオス三世を擁立し、他のオブシキオンの部隊なども糾合してコンスタンティノープル対岸のクリュソポリスに到達した。

一方でオブシキオンの反乱を知ったアナスタシオス二世も、それに対抗すべく準備を進めた。テオフアネスによるとアルテミオスはこれらのことを知ると首都で自らの家人をアルコンに任じ、彼によって造られた艦隊とともに彼らを武装させた。そして自らはニカイア市に退いて、その地を避難所とした。^③

アナスタシオス二世の軍と反乱軍は六ヶ月にわたって内戦をくり広げたが、反乱軍がコンスタンティノープルを制圧したため、アナスタシオス二世も抵抗をあきらめる。

（コンスタンティノープルの）市内にいたアルテミオスのアルコンたちは、コンスタンティノープル総主教のゲルマノスとともに集められてニカイアに連行された。それはアルテミオスと、彼とともにいる人々に（反乱軍がコンスタンティノープルを制圧したこと）証拠を示すためであった。アルテミオスは彼らの姿を見て絶望し、自らの身の安全を請うて降伏し、修道士の衣装をまとった。それでテオドシオスは彼に危害を与えることなく（彼を）テッサロニケに追放した。^{②③}

このような経過から、アナスタシオス二世からテオドシオス三世への政權交代の特徴がいくつか確認できる。第一に、フィリッピコスからアナスタシオス二世への政權交代の際とは異なつて、テマ・オブシキオンの軍が中心的な役割を果たしていることである。この理由は容易に説明できる。先述したようにテマ・オブシキオンは七一年のアナスタシオス二世の即位の際、体よく利用された上で見捨てられている。さらにさかのばれば七一年のユステイニアノス二世からフィリッピコスへの政權交代の際にも、オブシキオンのコマスのバリスバクリオスが処刑されている。^{②④}つまりこの時期、オブシキオンは歴代皇帝から厚遇されてはいなかったたのであり、こうしたことが中谷氏の指摘するように「自らの氣に入る皇帝を推挙するという拳」につながったのである。

注目すべき第二の点として、アナスタシオス二世が退位するまでの経過があげられる。六ヶ月にも及ぶ内戦の後、アナスタシオス二世は自らの身には恐らく危険が迫っていないにも関わらず、抵抗をやめて修道士となった。資料を見る限り、この理由は二点ある。一つはコンスタンティノープルが反乱軍の手に落ちたことである。コンスタンティノープルを掌握しているか否かは、政權の命運を左右する大きな要素であった。七一年の政權交代の際も、フィリッピコスがコンスタンティノープルを掌握したことがユステイニアノス二世の失脚につながっている。またレオン三世没後のコンスタンティノス五世とアルタバドスとの帝位をめぐる内戦の際も、当初コンスタンティノス五世が苦境に陥ったのは、アルタバス

ドスにコンスタンティノープルを握られたことが無視できない。

第二の理由として、「市内にいたアルテミオスのアルコンたち」が捕らえられたことがあげられる。アナスタシオス二世はニカイアに連行されてきた彼らの姿を見て絶望し、降伏しているのも、これがアナスタシオス二世の降伏の最大の理由である。この「アルコンたち」は、当時総主教だったゲルマノスの名前があげられていることをも考慮すると、アナスタシオス二世の「自らの家人」たちに加えて、コンスタンティノープルに残っていた中央政府の有力者たちも含まれていたと考えられる。すなわちアナスタシオス二世の即位にあたって彼と連携した「元老院」の人々や、アナスタシオス二世によって登用された「特に学識のある人々」である。実際、ゲルマノスもアナスタシオス二世によってキュジコス府主教から総主教に任じられたという経歴を持っている。

前節で分析を行ったように、アナスタシオス二世は首都の有力者の支持によって皇帝に即位した。その一方で即位にあつての軍の関与は部分的なものに限られ、しかも先帝フィリッピコスの拉致を実行した兵士たちの出身母体であるテマ・オブシキオンに対しては厳しい態度をとっていた。アナスタシオス二世と軍、特にテマ・オブシキオンとの関係は明らかに脆弱である^④。

オブシキオンの軍がコンスタンティノープルを制圧し、アナスタシオス二世を支えていた中央政府の有力者たちが反乱軍の手に落ちたため、アナスタシオス二世は政權基盤を完全に失うことになった。この時点で、アナスタシオス二世には自らの身の安全を保障してもらつた上で退位する他、打つ手がなくなっていたのである。

(三) 小 括

本章での検討結果を簡単にまとめておきたい。

フィリッピコスからアナスタシオス二世への政權交代に際しては、テマ・オブシキオンの関与は非常に限定的なもので

あった。実際にフィリッピコス失脚とアナスタシオス二世の即位を計画・実現させたのは「元老院」¹¹。コンスタンティノープルの有力な文官たちであった。オプシキオンは、フィリッピコスの拉致のために必要な人員を確保するために、これらコンスタンティノープルの有力文官たちに利用されたに過ぎない。また緑組のデーモスも関与をしているが、彼らは文官たちと密接な連携のもとに行動しており、彼ら自身が独自の政治的勢力として活動していたとは考えにくい。

こうした即位の経過からも明らかのように、アナスタシオス二世の政権を支えていたのは、コンスタンティノープルの中央行政機構の幹部たちであった。反面、アナスタシオス二世は軍からの強力な支持は得られていなかった。そしてそれがオプシキオンによる反乱とアナスタシオス二世の失脚という事態へと結びついていく。

前章で指摘したように、「混乱の時代」の皇帝にとって、軍隊の不満や軍事的な成果が挙げられないことは、その地位を不安定にさせる大きな要因であった。対ブルガリア戦争で成果を挙げられなかったフィリッピコスにも、そしてオプシキオンの不満を和らげることでできなかったアナスタシオス二世にも、これは当てはまる。

だが、フィリッピコスからアナスタシオス二世への政権交代は、軍以外にも政権維持に重要なファクターがあることを示している。それは、コンスタンティノープルの中央政府の要職にある人々の支持である。軍のみならず、中央政府をも確実に掌握することが政権維持の必要条件だった。またそれとともに、首都のコンスタンティノープルを確実に支配していることの重要性も留意しておくべきである。

- ① Agathon, p. 900.
- ② Agathon, p. 900.
- ③ Theoph., p. 382.; Nik., ch. 47.
- ④ ニケフォロスは会食を行った相手を「友人たち」としている。また日時もコンスタンティノープルの創建記念日（五月一日）としているが、これは原資料を誤解したためである。テオファネスでは創建記念日の競馬開催の記事に続いて、六月二日の会食の記事がある。
Theoph., p. 383.; Nik., ch. 48.
- ⑤ ヒッポドローム内にある小部屋で、競馬の際のレーン決定の時のくじ引きに用いられる器具（オルナ）を保管していた。この部屋はデーモスによって管理されていた。
⑥ Theoph., p. 383.

- ⑦ Agathon, p. 900.
- ⑧ J. Herrin, "Philippos and the Greens", in: Cl. Sode and S. Takács (eds.), *Novum Millennium: Studies on Byzantine history and culture dedicated to Paul Speck*, Aldershot, 2001, pp. 137-146.
- ⑨ デーモスが馬車競技の応援党派で、政治的行動をとることもあったことは周知の通りであるが、七世紀末―八世紀初頭にデーモスが独自の政治集団としての実体を持っていたか否かは判断しにくい。しかしこの時点ではデーモス（緑組）は独自の行動というよりは、コンスタンティノープルの有力者たちの意を受けて行動していたように感じられる。
- ⑩ Theoph., pp. 400-401.: Nik., ch. 57.
- ⑪ F. Winkelmann, *Byzantinischen Rang- und Ämterstruktur im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin (以下「Rang」略), 1985, S. 31.
- ⑫ J. F. Haldon, *Byzantine Praetorians: an administrative, institutional and social survey of the Opsikon and Themeia, c.580-900*, Bonn, 1984, pp. 256-264.
- ⑬ 元老院議員にはストラテゴスなどのテーマ幹部も含まれるが、このうちテーマに元老院が対比されており、中央政府の文官のことを元老院に記し、テーマをテーマと区別する。
- ⑭ Theoph., p.383.: Nik., ch. 48.
- ⑮ Theoph., p.373.
- ⑯ H.-G. Beck, "Senat und Volk von Konstantinopel", in: *Boyer: Akademie der Wissensch. Phil.-Hist. Kl. Sitzungsberichte 1965*, S. 1-75, S. 31 (Ann. 60).
- ⑰ F. Winkelmann, *Quellenstudien zur herrschenden Klasse von Byzanz im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1987 (以下「Klasse」略), S. 38-39.
- ⑱ 実際、後述するアナスタシオス二世とオブシキオンとの関係から考えて、オブシキオンがアナスタシオス二世を支持するとは考えにくい。またブルガリア軍の助力が必要なくとも、アナスタシオス二世を支持する軍隊がいなかったことを示唆する。
- ⑲ Theoph., p. 383.
- ⑳ Theoph., p. 384.: Nik., ch. 49.
- ㉑ かつて良質の木材（レバノン杉）を産出していたシリアの森林地帯は、この時期にはほぼ消滅しており、アラブは建艦用の木材の調達に苦しんでいた。
- ㉒ Nik., ch. 50.: Theoph., p. 385.
- ㉓ Theoph., p. 385.: Nik., ch. 51.
- ㉔ ただし内戦の中心はコンスタンティノープル近海での海戦であり、オブシキオンを中心とする反乱軍には有力な艦隊がなく、商船の徴発に依存せざるを得なかった。Theoph., p. 385.: Nik., ch. 51.
- ㉕ Theoph., p. 386.: Nik., ch. 51.
- ㉖ Theoph., p. 380. バリスバクリオスは「第一のバトリキオス (ἀρχιεργατικός)」とされており、彼（あるいはオブシキオンのコマス）の占めていた高い地位が示唆される。
- ㉗ 中谷前掲論文「二八頁」。
- ㉘ アナスタシオス二世とともにニカイアに避難した人々がいたことも、資料から示唆される。
- ㉙ 軍への新たな人材の登用は、軍での皇帝の発言力強化の意図もあっただろう。

四 レオン三世の即位をめぐる

本章ではレオン三世の、特に皇帝即位までの経過に焦点を当てて、レオン三世の経歴と彼を支持していた集団に関して分析していく。

（一）レオン三世の経歴

レオンの経歴に関しては、テオフアネスの伝えている経歴が一般に流布している。ゆえにはじめに、テオフアネスの伝えるレオンの経歴^①を紹介しておきたい。

レオンはシリア北部のゲルマニケイア出身である。ゲルマニケイアとその周辺地域は、七世紀末の時点ではビザンツ帝国とアラブとの間で領有をめぐる争いが続いていた^②。そんな時期に、レオンらゲルマニケイアの住民たちは、ユステイニアノス二世の命によってトラキアのメセンブリアに移住させられたという。そして七〇五年、ユステイニアノスが帝位奪回をめざしてトラキアを南下していた時に、ユステイニアノス二世に羊五〇〇頭を贈ってユステイニアノス二世の知遇を得る。そしてユステイニアノス二世が帝位を奪回すると、ユステイニアノスはレオンを「すぐにスパタリオスとし、彼を親友とした」。

だがレオンはユステイニアノス二世から疑念を抱かれるようになる。レオンはユステイニアノス二世の命令で、コーカサス地方に派遣された。これはレオンが不慮の死を遂げることを期待してのユステイニアノス二世の計略だったと、テオフアネスは伝えている。だがレオンは無事コンスタンティノープルに帰還した。なお一二世紀に著されたゾナラスの『歴史摘要』によると、レオンの帰還は既にアナスタシオス二世の時代になっていたとい^③、現代でもこのゾナラスの記述を信頼している研究者もいる^④。

アナスタシオス二世はレオンの才能を認め、彼をテマ・アナトリコンのストラテegosに任じた。そしてアナスタシオス二世が失脚してテオドシオス三世が即位した後も、レオンはテオドシオス三世に従わず、アナスタシオス二世支持を続けた。そして同じ立場をとったテマ・アルメニアコンのストラテegosのアルタバドスと結んだ。

テオフアネスの伝えるこの経歴が、一般に流布しているが、この報告には問題点も多い。第一に、同様の報告を行う資料が他に存在しない。テオフアネスと類似した記述を行っている資料は、ゾナラスのようにテオフアネスより時代の下る時期に著されたもの、すなわちテオフアネスに基づいて記述を行っているものしかない。この時期に関してほぼテオフアネスと同一の原資料に基づいていると思われるニケフォロスの『簡約歴史』には、レオンのアナトリコンのストラテegosス就任前の経歴は存在しない。

第二に、テオフアネスの報告に伝説的な色彩が強いことが挙げられる。例えば一介の羊飼いがユステイニアノス二世と面会して、スパタリオスの位を与えられたりしている点である。スパタリオスは九世紀以降は中位の爵位となるが、この時期にはなおその軍事的な職務をある程度残していた。またテマのストラテegosが同時に帯びていることもあり、一介の羊飼いに与えられることはほとんどあり得ない^⑦。またコーカサス遠征も、ゾナラスが伝えているような二度の政権交代をはさんでの、長期間の行動が可能とは考えにくい。さらにこのコーカサス遠征（テオフアネスの報告を見る限り、所期の目的を達成したとは言えない）のみで、アナスタシオス二世が彼を有能な人物と認め、アナトリコンのストラテegosに任命したというのも不自然である。

このように、テオフアネスの伝えるレオンの経歴には疑問点がいくつも存在する。無論テオフアネスの報告を否定することはできないが、これだけでは不十分なのである。ゆえに、その他の資料をも参照する必要がある。

レオン三世の経歴に関してテオフアネスの他に報告を行っているものとしては、偽ヨハネス・シグマスケノスの『皇帝テオフィロスへの書簡』（九世紀中盤成立）と、修道士ゲオルギオスの『年代記』（九世紀中盤―後半成立）がある。これらには、

さてアナトリコンの軍管区を、パトリキオスのシシニオスなる人物が管轄していたが、彼は兵士の徴募のために管区内を巡察していた。この時に粗野なレオンは兵士として徴募され、そしてわずかな間に大きく出世して皇帝テオドシオスによってスパタリオスの位を与えられるまでに成り上がった。そして彼によって当時蛮族の手に落ちていた西方の領域、カンパニア、アマルフィ、ナポリに派遣された。彼はそれらの地へ一二〇隻のドロモン船と船員たちを率いて赴き、勝利を収めて和平を結び、帝国に帰還した。そしてすぐに兵士たちによって皇帝と宣言された。それで先述した皇帝テオドシオスはレオンと会見し、自らの頭上から帝冠をとってレオンに授けたのである。^⑧

とある。

この報告はスパタリオス位を与えたのがユスティニアノス二世ではなくテオドシオス三世となっているなど、テオフファネスの記述とクロノロジが矛盾している部分がある。^⑨そのため、従来はほとんど無視されてきた。^⑩だがこの報告それ自体には、テオフファネスの記述とは異なつて伝説的な色彩をまとつた部分は小さい。資料自体の成立時期もテオフファネスから大きく遅れているわけではなく、その情報を完全に誤りと決めつけてしまう決め手もない。

それゆえ、テオフファネスと偽ヨハネスⅡダマスケノス／ゲオルギオスの双方に歴史的事実を認め、双方を両立させようとするヘンデイの主張^⑪を無視することはできない。ヘンデイによると、ゲルマニケイアはビザンツ帝国の支配下にあつた時期にはテマ・アナトリコンの管轄区域内にあり、ゲルマニケイアからメセンブリアへの住民の移動は、アナトリコンのストラテゴスの指揮下に行われた。彼はさらに、レオンによるイタリア遠征をテオドシオス三世の時代ではなく、ユスティニアノス二世の二度目の治世、七〇五―七一年のあいだに行われていると考えている。確かに、テオドシオス三世の時代にイタリアに艦隊が派遣されることは考えにくく、一方で七〇五―七一年の間にはベネヴェント公ギスルフのカンパニア攻撃（七〇三／四年）や教皇コンスタンティヌス（在位七〇八―七一年）のコンスタンティノープル訪問（七一〇―七一年、カラビシアノイが出勤）、ラヴェンナ総督ヨハネスⅡリゾポスの殺害（七一年）など、イタリアではいくつも

の重大な事件が起きていた。別稿で指摘したように、イタリア方面を統括していたシチリア島の艦隊はこの時期、アラブの北アフリカ制圧とチュニスへの艦隊設置への対応に追われ、イタリア本土の状況に積極的に関与することができなかった。^⑫ そのためヘンデイの指摘するように、東部地中海方面から南イタリアへ艦隊が派遣された可能性は十分に考えられる。そしてレオンのコーカサス遠征がアナスタシオス二世時代にまで及んだと伝えているのが後代のゾナラスであり、テオファネスは明確に「ユステイニアノスのところに」戻ったとしていることを考え合わせると、レオンのコーカサス滞在はさほど長期間には及ばず、ユステイニアノス二世時代にその他の任務にもついていた可能性が高い。そしてそうであれば、アナスタシオス二世が彼をアナトリコンのストラテーゴスに任命した理由もより明確に理解できる。レオンはコーカサス遠征の他にも各種の任務につき、多くの実績を残していた。そしてそれゆえに皇帝の目に留まったのである。

また最近、印章資料から確認できるトゥルマルケス／パトリキオスのコノンなる人物が、レオン三世と同一人物である可能性が指摘されている。^⑬ テマの主要な役職であるトゥルマルケス職への就任も、これまでの分析の結果と矛盾しない。

以上要するに、レオンはユステイニアノス二世の最初の治世に、シリア北部のゲルマニケイアからビザンツ帝国に移住してきた。レオンは軍人として勤務し、少なくともユステイニアノス二世の二度目の治世以降は各種の軍務で指揮官としていくつかなの実績を上げた。それがアナスタシオス二世の目に留まり、軍への発言力強化のために新たな人材を抜擢しなければならなかったアナスタシオス二世の意図とも一致した。そのためレオンはテマ・アナトリコンのストラテーゴスに任命されたのである。

こうしたレオンの経歴からは、彼が資料の伝えるような低い社会階層の出身ではないことが示唆される。ハルドンが分析しているように、八世紀中盤―後半において、一般の兵士が上位の軍司令官、あるいは皇帝の知遇を受けて急速にその地位を上昇させることは不可能であった。急速な昇進が可能だったのは、社会的地位の高い人物やその子弟たちであった。^⑭ 八世紀初頭―前半に関しては、資料がないため詳らかにできないものの、八世紀中盤以降と大きな差異はなかったと考

えていいだろう。レオン三世のスパタリオス位の保持や急速な昇進は、彼が比較的高い社会的出自を持っていたことを示している。つまりレオン三世は「混乱の時代」の他の皇帝と同様、第二章で確認したような一定以上の高い社会的地位を持った人物として認識され得たことを示している。レオンは皇帝位につくための第一の条件をクリアしていたのである。

（二）レオン三世の即位

先述したように、レオンはアナスタシオス二世の失脚後テオドシオス三世に反抗し、アナスタシオス二世を支持する態度を明確にした。一方この時期はコンスタンティノープルへ向けてアラブが本格的な攻撃を開始する時期でもあった。緊迫した情勢の中、レオンはアルタバズドスと結んで、皇帝として即位する。本節はこうした、レオン三世の即位にいたるまでの展開を検討する。

テオドシオス三世が退位して、レオン三世が即位する誘因となったのは、レオンとアルタバズドスが連合してコンスタンティノープルに迫ってきたことである。だがテオドシオス三世に直接引導を渡したのはレオンらではなかった。テオファネスによると、

一方ストラテゴス（レオン）は皇帝の息子と、彼と心を同じくする者たちとともにクリュソポリスに進んだ。テオドシオスはこの事を知ると、総主教のゲルマノスや元老院議員たちと協議を行った。そしてこの総主教を通じて、彼の身の安全と教会を平和裏に保持することを保証する約束を取り付けた。それでテオドシオスは彼の息子とともに聖職者となり、彼らは余生を平穩に過ごした。^⑮

またニケフォロスには、

それ（アラブ軍のコンスタンティノープル攻略作戦）を知ると軍や行政府の要人たちは、テオドシオスの経験の欠如と敵軍に対して抵抗する能力が十分ではないことを考えて、彼に対して帝国の統治権を手放し、平穩に私人でいるように勧告した。こうして彼

は一年間の治世の後、引退した。^⑩

とある。テオドシオス三世を最終的に引退に追い込んだのは、レオンやアルタバスドスではなく、中央政府の要人たちだったのである。

ここで、総主教のゲルマノスが有力者としてひとり名前が挙げられていることに注意したい。前章で指摘したように、ゲルマノスはアナスタシオス二世によって任命され、アナスタシオス二世とテオドシオス三世との内戦の際にもコンスタンティノープルにあつて最後までアナスタシオス二世を支持していた人物である。すなわち彼は元来アナスタシオス二世を支持する有力なメンバーの一人だった。彼が中心的役割を果たしてテオドシオス三世に引導を渡したこと、そして他の人々も「元老院議員たち」や「行政府の要人たち」であることを考えると、ゲルマノスだけではなく他の人々も、元来はアナスタシオス二世を支持し、彼の政権を支えていた人々であると考えられる。つまりかつてアナスタシオス二世を支えていた、コンスタンティノープルの有力な文官たちがレオンの皇帝即位を支持したのである。

この場合、以下の二点が解明されなければならない。第一に、中央政府の要人たちはなぜレオンを支持したのか。第二に、テオドシオス三世を擁立したテマ・オブシキオンはどのような行動をとったのか。

第一の点に対しては容易にその答えが用意できる。レオンはテオドシオス三世が即位した後も、アナスタシオス二世を支持すると称していた。無論これはテオドシオス三世に反抗する口実だろう。^⑪しかしコンスタンティノープルの要人たちが、レオンをすぐに受け入れていることも無視できない。恐らくレオンはアナスタシオス二世時代から、コンスタンティノープルの有力文官たちとも何らかの關係を持っていたのである。これはレオンがアナスタシオス二世によってアナトリコンのストラテーターゴスに登用されたことと關係があるだろう。アナスタシオス二世に認められ、頭角を現してきたレオンは、アナスタシオス二世を支えていた（あるいは、レオンと同じくアナスタシオス二世によって認められ、頭角を現してきた）首都の文官たちにとつても、受け入れることのできる人物だったのである。

次に第二の点について分析したい。テオドシオス三世の時代、恐らくテオドシオス三世の息子がオブシキオンのコメスを勤めていた。そして彼はオブシキオンを率いて小アジアのニコメディアでレオンたちと対峙したものの、レオンは容易にテオドシオス三世の息子や幕僚たちを捕らえている。^⑮すなわちオブシキオンはレオンたちに対して目立った抵抗を行わず、彼の即位を積極的に阻止しようとはしていない。

こうした動きの要因として、第二章で指摘したような皇帝が求められる軍事的な成果を、テオドシオス三世があげられなかったことがあげられる。テオドシオス三世の時代、アラブは小アジアの奥深くに侵攻し、コンスタンティノープル包囲は時間の問題となっていた。こうした状況下、アラブの攻撃を撃退することのできる有能な軍人が希求されていた。ニケフォロスが「テオドシオスの経験の欠如と敵軍に対して抵抗する能力が十分にはないことを考えて」と伝えているのは、このことを明確に示している。厳しい状況下、オブシキオンもレオンの皇帝就任を認めざるを得なかったのである。

なおコンスタンティノープル近郊に駐屯する軍事力としては、オブシキオンの他に艦隊も存在した。だが艦隊がレオンの即位に反対した形跡はない。アラブによるコンスタンティノープル包囲の際に、レオン三世が艦隊を積極的に活用し、自ら艦隊の指揮をとっている可能性が高いことを考えると、艦隊もレオン三世の即位を支持していたのだろう。この理由としては、レオン自身に艦隊指揮の経験があることや、艦隊もアナスタシオス二世によって強化された組織であることが考えられる。

以上要するに、レオンはテマ・アルメニアコンのストラテゴスだったアルタバスドスの支持を得て、帝位をめざしてコンスタンティノープルへ進撃した。この際コンスタンティノープルの有力な文官たちはレオンを支持してテオドシオス三世に退位するよう説得した。これは、コンスタンティノープルの有力文官たちが元来アナスタシオス二世の政権を支えていた人々であり、同じくアナスタシオス二世によって拔擢されたレオンと何らかの関係を持っていたからである。同じくアナスタシオス二世との関係が深い首都の艦隊もレオンを支持した。テオドシオス三世を擁立・支持したテマ・オブシ

キオンも、アラブがコンスタンティノープルに迫る緊急の状況下、テオドシオス三世に軍事的才能が欠如していたために、レオンの即位を認めざるを得なかった。すなわちレオン三世は首都にいた中央政府の要人たちと、軍隊の双方の支持を取り付けることに成功し、皇帝位についたのである。

レオン三世は即位直後、アラブのコンスタンティノープル攻撃を切り抜ける。軍事的成功を手にしたことによって、彼の皇帝としての地位が強化されたことは疑えない。だが、それでもなお彼の政權基盤が盤石なものとなったわけではなかった。はじめに述べたように、レオン三世の治世初期には二つの陰謀が発覚している。特に七一九年頃にアナスタシオス二世によって起こされた陰謀は、前章でも触れたようにマギストロスのニケタスⅡクシュリニテスら、中央政府の要人たちも参画していた。治世初期のレオン三世は、中央政府の有力者たちの離反の危険性を気にしなければならなかった。

だが陰謀は失敗に終わる。軍の支持がなく、コンスタンティノープルの掌握もできていない状況下、アナスタシオス二世の復権が困難だったことは容易に想像できる。また陰謀の露見は、首都内においてもアナスタシオス二世を支持する勢力が大きくなかったことを示唆する。既に中央政府の有力者たちも、大半はアナスタシオス二世ではなくレオン三世を支える集団へと、転化していたのである。

陰謀発覚後、レオン三世はアナスタシオス二世やニケタスⅡクシュリニテスらを処刑した。これは首都の有力者内にお存在していた、アナスタシオス二世の復位を期待する勢力を完全に駆逐することになった。そして恐らくこの時に、最大の盟友であるアルタバスドスを、オプシキオンのコメスに任命する^④。この施策はレオン三世の没後に大きな内戦を引き起こすことになるように、根本的な事態の解決にはならなかったが、少なくともレオン三世の時代には有効に機能した。

七一九年頃の陰謀を收拾したことによって、レオン三世はコンスタンティノープルの有力文官たちと軍の双方の、完全な掌握にほぼ成功した^⑤。そしてそれは、二〇年以上にわたって続いていた「混乱の時代」にも終止符を打つものだったの

である。

- ① Theoph., pp. 391-395.
- ② cf. St. Gero, *Byzantine Iconoclasm during the Reign of Leo III: with particular attention to the oriental sources*, Louvain, 1973, pp. 25-31.
- ③ Zonaras, *Epitome historiarum*, Leipzig, 1868-75, pp. 251-252.
- ④ 廖正興 M. Canard, 'L'Aventure Caucasienne du Spahaire Léon le futur empereur Léon III', *Revue des Études arméniennes* 8 (1971), pp. 353-357.
- ⑤ cf. Il. Ochow, *Byzanz im 8. Jahrhundert in der Sicht des Theophanes*, Berlin, 1991, S. 81-83.
- ⑥ レオンがメヤンポリスへ移住せられた「こと」多くの研究者らによって疑問視せられる。cf. Gero, op. cit., pp. 30-31.
- ⑦ cf. Rang.: Haldon, op. cit., pp. 182-190.
- ⑧ Pseudo Johannes Damascenus, *Epistula ad Theophilum Imperatorem de sanctis et venerandis imaginibus*, in: PG 95, col. 345-385, col. 357B-C; GM p. 737. ランゴの訳は『ゲオルギオス年代記』に基く。『皇帝テオフィロスへの書簡』ではストラテゴスの名前は「メニニオス」となっている。
- ⑨ 一〇世紀の『シメオン年代記』には、全体の記述は『ゲオルギオス年代記』などに従いつつ、レオンをスパタリオスに任命したのはユスティニアノス二世で、テオドシオス三世はレオンをアナナリコンのストラテゴスに任命したと述べている。Theodosius Melitenus, *Chronographia*, München, 1859, p. 120.
- ⑩ cf. Gero, op. cit., p. 30 (n. 21).
- ⑪ M.F. Hendy, *Studies in the Byzantine Monetary Economy c. 300-1450*, Cambridge, 1985, pp. 667-669.
- ⑫ 拙稿(a) 第IV章参照。
- ⑬ F. Winkelmann (et al.), *Prosopographie der mittelysantinischen Zeit: Erste Abteilung (641-867)*, 6 vols, Berlin, 1998-2001, no. 3686 & 3687; J. R. Martindale (ed.), *Prosopography of the Byzantine Empire I: (641-867)*, London, 2001 (CD-ROM), Leo 3 & Konon 7; I. Rochow, op. cit., S. 82. ロンゴはレオン三世の旧名であることは、それぞれ『ゲオルギオス年代記』や『ゲオルギオス年代記』を基く多くの資料で言及されている。Theoph., p. 407; GM, p. 735.
- ⑭ Haldon, op. cit., pp. 328-337.
- ⑮ Theoph., p. 390.
- ⑯ Nik., ch. 52.
- ⑰ ゼンレオン三世が本心からアナスタシオス二世を支持していたのであれば、オプシキオンが反乱を起こした時点（あるいはそれに近づく時）で行動を起こしているはずである。
- ⑱ Theoph., p. 390; cf. Klasse, S. 38.
- ⑲ 拙稿(a) 第一章参照。
- ⑳ ただしアルタバストスがイソエスの直接の後任か否かを決定する資料はなく、短期間別の人物がコマスを勤めていた可能性も排除できない。Rang, S. 73-74.
- ㉑ ただし軍に関しては、レオン三世の時代、特に治世初期の段階では、陸のテマ・オプシキオンと海のカラビシアノイという、本質的な不安定要因がなくなっていたわけではない。拙稿(a) 第三章参照。

五 おわりに

最初に、本稿での考察を総括しておきたい。

「混乱の時代」の約二〇年間、ビザンツ帝国の政情は激しく混乱した。この時代の皇帝たちが長期にわたって帝位を維持できなかった理由は、その支持基盤の脆弱さに求められる。帝位の維持のためには、軍隊と中央政府の双方を掌握することが不可欠の条件だった。また、首都コンスタンティノープルの物理的な掌握や、比較的高い社会的出自、そして軍事的な成功も、皇帝に就任するための必須条件となっていた。「混乱の時代」の諸皇帝は、少なくともそのいずれかの支持が欠けている者が多かった。

それに対してレオン三世は、こうした条件を満たしていた人物であった。彼は従来考えられていたほど、低い社会階層の出身ではない。そして艦隊を含む軍隊の幅広い支持を獲得し、首都からアラブ軍を撃退したことによって軍事的な名声をも獲得した。さらに彼はアナスタシオス二世によって登用されており、アナスタシオス二世を支持していた中央の有力者たちにとっても受け入れやすい人物であった。すなわちレオン三世は当時の帝国を支える集団から、幅広い支持を集めることに成功していたのである。

このような、地方に拠点を持つ軍と中央政府の双方からのサポートの必要性は、八世紀前半までに徐々に姿を現してきた新しいビザンツ国家が、どのような原理で運営されていたのかを示すものでもある。

七世紀、地方では行政機構の軍事化が進展した。すなわち元来純粋な軍管区に過ぎなかったテーマが、地方の行政権をも徐々に吸収していった。中央にテーマに対抗できるような本格的な軍事力が存在していなかったこともあり、リーリエが指摘しているようにコンスタンティノープルの中央政府は地方に対しては限定的なコントロールしかできなかった^①。かかる状況では、軍Ⅱ地方の支持を得て軍事的成功を収めうる能力を持った人物でなければ、帝位の維持は困難だった。軍Ⅱ地

方を掌握することのできなかった「混乱の時代」の皇帝たちは、その地位を長く維持することはできなかった。^②

しかしながら、地方は中央から分離・独立しようとはしなかった。むしろ、地方で反乱を起こしたテマは常に首都をめざす^③という、一見逆説的な現象が生じている。はじめに概観したように、これまでの研究はテマの動向に主に着目してきた。だがそれだけでは、なぜテマが中央から分離せず、このようにみな中央をめざすのか——換言すればなぜ七—八世紀にビザンツ帝国が分解・崩壊せずに国家統合が維持されたのか——を、明確に説明することは難しい。

本稿での検討は、この問題についての解答を与えてくれよう。七—八世紀の小アジアのテマはいずれも規模が大きく、相互にはば拮抗した軍事力を持っていた。そのためあるテマが帝国の実権を握ろうとしても、他のテマがそれに反対するという状況にあった。^④そのため、他のテマに対して優位に立つためには、コンスタンティノープルを掌握し、さらに中央政府やそれを動かしている有力な官僚たちの支持を得る必要があった。このことはテオドシオス三世を擁したテマ・オブ・シキオンのように中央の有力者たちをなしば抑圧した政権が短期間で崩壊したこと、一方で中央の有力者たちと連携してテマ・オブ・シキオンに対する優位を形成したレオン三世の成功からも明らかである。

このように中央政府は、帝国の実権をめぐるテマ同士の対立・競合関係のなか、帝国全体の支配のためのキャスティングボートを握る形になっていた。他方、アナスタシオス二世の例から明らかなように、中央政府の有力者のみで政権を維持していくことは不可能で、彼らもテマと連携していかなければならなかった。つまりテマ・地方も中央政府も、皇帝を選出し、帝国を運営していくための不可欠な要素であり、またそのために互いを必要としていたのである。

はじめに述べたように、本稿で考察した時期は、時間をかけて少しずつ進んでいった変化の末、中期ビザンツ国家が姿を現した時期である。中期ビザンツの時代にも、古代末期と同様に軍は皇帝選出時に決定的な影響力を及ぼし続けていた。だが我々はそれと同時に、中央政府の有力者たちの果たしていた役割を軽視するべきではない。彼らは後期ローマ帝国の時代とは違って、皇帝選出儀礼の際の名目的な「皇帝任命権者」としての元老院・元老院議員にとどまらない重要性を獲

得しつづつあった。^⑥ 中央政府の有力者たちは八世紀初頭までに、中期ビザンツ国家の政治を動かしていく不可欠なプレイヤーになったと言つてよいだろう。^⑦

レオン三世はテーマの支持に立脚した単なる「軍人皇帝」ではなかった。彼は中期ビザンツ国家の皇帝選出のダイナミクスを巧みに活用して皇帝に選出され、そして長期にわたつて帝位を維持すること成功したのである。

① R.-J. Lilie, *Byzanz: Kaiser und Reich*, Köln, 1994, S. 50.

② 「混乱の時代」以前でも、コンスタンティヌス二世（在位六四一—六六八年）は対アラブ戦略に対する軍の不满から暗殺されている。拙稿「コンスタンティヌス二世のシチリア進出—七世紀中盤のビザンツ帝国と中部地中海—」『史林』八一—五、一九九八年、一四四—一六四頁、一六一頁。

③ 中谷前掲論文、三二ページ参照。

④ cf. Kaegi Jr., op. cit., p. 203.

⑤ 元老院が「皇帝任命権者」としての公的・制度的な地位を獲得する

のは六世紀以降である。Lilie, op. cit., S. 21-22; cf. 渡辺前掲書、九—一三頁。ゆえに八世紀前半におけるこうした状況は、古代末期以来連続していた変化の一環と考えることも可能かもしれない。

⑥ ただしこのことは、七—八世紀の中央政府の高官たちが貴族層として安定した集団を形成していたことを示すのではない。Lilie, op. cit., S. 62-63.

⑦ こうした状況は九世紀にも確認できる。拙稿「ミカエル三世と『従者団』——九世紀中盤ビザンツ帝国の皇帝と支配構造——」『史林』七八—一、一九九五年、三八—七四頁参照。

The Dynamics of the Election
of the Byzantine Emperors in the Seventh and Eighth Centuries:
The Emperors of the “Age of Anarchy”

by

KOBAYASHI Isao

For a period of about twenty years, from the end of the seventh century to the beginning of the eighth century (695-717), the Byzantine Empire experienced great confusion in its internal affairs: rebellions and conspiracies against emperors occurred frequently, and all emperors during the period were deposed violently. It was not until the accession of Leo III (717-41) that this “Age of Anarchy” was brought to an end. This study analyzes the dynamics of the election of emperors during the “Age of Anarchy” and the first years of Leo III’s reign.

A number of Byzantinists have previously given consideration to the influence of the *theme*, corps of the Byzantine army, in the elections during this period. Considerable attention has also been paid to the actions of the Theme of *Opsikion*, which was stationed near Constantinople, and to the significance of it being an Imperial Guard directly attached to the throne.

Indeed, we cannot ignore the actions of the theme in examining the political circumstances of the empire during this period. But we must focus not only on the theme stationed in the countryside, but also the high-ranking civil officials in Constantinople. For example, when Artemius, the *protasekretis* (minister of the imperial secretary) was crowned and renamed Anastasius II (713-15), he acquired the support of the officials of Constantinople and the *demes*, factions of the circus, which were under the influence of the high-ranking officials. However, the theme scarcely played a significant role in this coup d’etat. Throughout Anastasius II’s reign, the relations between the emperor and the various theme, especially the Theme of Opsikion, were strained. For this reason, the Theme of Opsikion revolted against him in 715 and made Theodosius III (715-17) the new emperor. Theodosius III, however, failed to gain the support of the central administration and those theme, other than the Opsikion. Due in part to this failure, he was deposed.

In this way, all emperors during the “Age of Anarchy” failed to obtain the support of either the theme or the central administration, or both. On the other

hand, Leo III succeeded in acquiring the support of both. He was an experienced general and he had been a *strategos* (military governor of a theme), of *Anatolikon* before his succession. In addition, many high-ranking officials of the central administration supported him; many of whom had supported Anastasius II in 713. The reason high-ranking officials approved of Leo III can be attributed to his early career. He had been appointed *strategos* of *Anatolikon* by Anastasius II and had revolted against Theodosius III shortly after Anastasius II was deposed. Leo III is likely to have had a close relationship with Anastasius II, who had also sought to build a close relationship with the ablest general in order to gain the support of the theme. For this reason, many high-ranking officials of the central administration supported him in 717.

In conclusion, this thesis argues that it was necessary to gain the support of both the central administration and the theme in the countryside in order to maintain the rank of emperor during this period. Leo III succeeded in this, and for this reason, he was able to maintain his place on the throne for over twenty years.

The Accumulation of *Shouen* Holdings by the Tokudaiji Family

by

SAEKI Tomohiro

The process of the Tokudaiji family's accumulation of *shouen*, estates, was characterized by the synchronization of their actions with the political situation.

In the first half of the *Toba insei*, the period of rule by Retired Emperor Toba, the Tokudaiji family established *shouen* by exploiting their relationship with the royal family by marriage. They also contributed to the establishment of other *shouen* of the royal family.

However, in the second half of the *Toba insei*, the Tokudaiji family was unable to establish *shouen* on their own due to the rise of the faction of Bifukumon-in. They, instead, established *shouen* with the support of their political allies Fujiwara no Tadazane and Fujiwara no Yorinaga.

After the succession of Emperor Go-Shirakawa to the throne, the Tokudaiji developed a relationship with the emperor by marriage and were thus able to establish *shouen* on their own. Then, when the faction of Emperors Nijou and